

アジャンター石窟における観音諸難救済図

A study on Avalokiteśvara the Savior in the Ajaṅṭā Caves

福山 泰子 (FUKUYAMA Yasuko)¹⁾

1) 名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期課程
Doctral Course, Graduate School of Letters, Nagoya University

Abstract

Avalokiteśvara who saves people from eight kinds of dreads, was much popularity with Buddhist people. According to the ‘Saddharmapuṇḍarīka-sūtra’, merciful Avalokiteśvara Bodhisattva rescues people from many kinds of disasters – elephants, snakes, swords, evil spirits such as ogresses, lions, fire, robbers and shipwreck. As far as the Avalokiteśvara the savior images in the Ajaṅṭā caves, there are already some articles published by D. Schlingloff, M. Mallmann, and Japanese scholars.

I examine those images of Avalokiteśvara the Savior to find out the elements that influenced the selection of disasters, and more to clarify the meaning of the execution of those images in the Ajaṅṭā Caves.

Dreads seen in those images are unable to be interpreted with ‘Saddharmapuṇḍarīka-sūtra’. They might be rather related with the actual disasters in the ancient India. However, in the Pala period, important role of rescuing people was expanded from Avalokiteśvara to include its consort Tārā as a savior. There are some of Chinese materials of Aṣṭābhaya-Tārā Sutras where we can recognize some characteristic of this deity. Surprisingly, the details of disasters match the ones of Ajaṅṭā images. As no direct evidence exists, this hypothesis may be possible that the actual images have influenced to the textual version.

はじめに

インドにおける菩薩の成立と展開に関しては、現存作例として紀元後2～3世紀のクシャーン朝時代のガンダーラやマトゥラー出土の観音、弥勒と知られる像が確認できるものの、ポスト・グプタ期のエローラや8世紀中期に興起するパーラ朝以降の図像で多様な菩薩像—経典儀軌と造形作品の一致が見られる—のように図像が明確化されるまで、クシャーン朝に続くグプタ朝の菩薩像の作例は非常に少ないのが現状である。また西インドにおいて石窟の造営活動が活発となる5世紀にあっても、まだ、菩薩の図像は一定しておらず、それは観音菩薩においても同様である。そのような状況で、西インド、アジャンター石窟やアウランガーバード石窟、カンヘーリー石窟に残る観音諸難救済図(以下、諸難救済図と略する)は明確に観音菩薩と同定できるものとして貴重な遺例といえる。諸難救済観音像は西インド石窟以降、その姿を消し、その後、パーラ朝において、ターラー菩薩の諸難救済図として再び図像化される¹⁾。諸難救済図に関する研究はD. シュリングロフ、M. マルマンをはじめ、日本ではインドの諸難救済図を取り上げられた山田耕二氏やアジャンターの菩薩像について考察された島田明氏の論考があり、注目される²⁾。

本稿ではアジャンター石窟における諸難救済図を取り上げ、観音菩薩の図像的特徴とともに、諸難の

選択、配置の問題について考察する。アジャンターに見られる諸難救済図は、現在10作例確認でき³、その表現形式は単独像と、対尊の一体として表されるものの2つに分類される。以下に、諸作例を見てゆくことにする。また、参考資料として諸難を確認できる作例のみ簡単な配置図をつけた(資料②)。併せて参照いただきたい。

1. アジャンター石窟の観音諸難救済図

(1) 第2窟仏殿左前壁(図1)

第2窟の諸難救済図⁴は画像で、仏殿の左前壁に位置する。第2窟は側廊や後廊、前室に至るまで、当初ではない小規模の寄進による壁画が多数見受けられるが、この諸難救済図は様式的にも石窟造営当初のプランにあった主題とみて相違ない。全体的に剥落箇所が多く、印相も明確に判断できない状態ではあるが、残存箇所を頼りに、その図像を見てゆくことにしよう。観音の頭光は、五重の楕円形で、外縁部に装飾的な文様が施されている。その他は線によって区切られ、色面で彩色する簡素なものである。観音は頭髪を髮髻冠に結び、後れ毛を肩に流すが、化仏の有無は定かでない。また左手に水瓶を執る。一方、右手は一種の施無畏印の変形と見られる印をむすぶ。蓮華を執る可能性もあるが、剥落箇所が大きいため想像の範囲でしかない。左肩には天衣の一部がみられる。足元に翻るその先端部分から鹿皮の可能性は絶たれよう。蓮台に乗る観音のつま先部分は蓮台部分も含めて極めて状態が良好で、やや親指を浮かせて立っているのがわかる。

危難場面に関しては、後述する第17窟同様に左右各4つ配されたメダイオン内に危難が表されている。危難は二場面をのぞいて殆ど比定できない状態である。向かって右列から見てみよう。最上部は既に剥落して残っていない。次のメダイオン内には、観音に救済を求める人物と、手に何かを持つ人物の一部が窺える。刀剣難の可能性も考えられよう。その下方は、右手の人物が手に鎖のようなものを持っていることから枷鎖難と見られる。右列最下メダイオンには、定型化された水の表現に船が描かれていることから、水難に違いない。一方、左列最上部は剥落もあって、救済を求める人物しか残らないが、もともと人物を襲う対象、つまり危難が描かれる余白が極めて小さいことから火難の可能性が考えられよう。その下方は獅子難が表される。またその下は剥落が激しく、もう一場面挿入された可能性が考えられるが、現在その場面を特定することはできない。左列最下部はわずかに残る逆立った頭髪から悪鬼・羅刹の難(以下、悪眼とする)と考えられる。

(2) 第4窟ヴェランダ右後壁(図3)

諸難救済図は第4窟中央入口のすぐ右手に彫刻されている。これは、その面長の面部や細身の体躯などからみて後刻で、第4窟造営当初のものではないことは明らかである⁵。

左右両端に柱頭装飾をもつ円柱形の柱で区切られた区画は、浅い壁龕を形成する。龕とは別に区画上方にはチャイティヤ窓風の龕が設けられ、そのなかにも倚坐像の仏陀が説法印を結んで表される。その位置や大きさから、この仏陀像も壁龕の諸難救済図と一連のものと考えよう。向かって右、最下段が摩滅が甚だしいことを除いては、かなり状態が良好な作例である。龕中央には楕円形の頭光をつけた観音が蓮華座の上に、やや足を開いて直立正面向きの姿勢で大きく表されている。先述したとおりその幾分瘦身気味な華奢な体つきは、既にポスト・グプタ期の雰囲気漂わせている。

頭頂部には高い髮髻冠を結び、その前面に楕円形の身光を背にした化仏が結跏趺坐し、説法印を結ぶ。上半身は何も纏わず、下半身は長い腰巻状のドーティーを足首付近まで覆い、その端を折り畳んだ襷が股間に下っている。ドーティーは腰紐で締めて留めてあるが、その上に華やかな装飾的な帯を締め

る。右手は手首より先を欠失しているが、おそらく施無畏印を結んでいたと考えられる。左手も肘から先が失われているが、他の例と同じく垂下して観音の足下左の大地より生じる未敷蓮華の茎を執っていたと思われる。頭上には、飛天が左右に各一体、観音に向かって花綱を捧げて雲中に舞っている。飛天の外側にはそれぞれ仏坐像が配される。観音の向かって右は与願印を結び、左は説法印を結ぶ。

次に左右危難場面を見てゆくことにする。各段に共通するのは危難に遭遇した人々が観音に向かって合掌する場面が表されている点である。それらの危難場面は基本的に襲うものと危難を被る人物で構成される。襲われる人物はいずれも男女対で表される。

左列は上から象難、獅子難、剣(王難)、水難で、右列は上から火難、毒蛇難、枷鎖の難が表される。最下方は、一人の女性が髪を逆立て手を振り上げた人物に追われている。摩滅のために判然としないが、女性が子供を抱きかかえているようにも見える。この段について、マルマンは髪を逆立てた人物をカーリー女神として死難とするが⁶、その根拠は明確に示されておらず、経典に拠るならばむしろ羅刹や悪鬼の難、悪眼とするのが妥当のようにも思われる。ただ、フーシェの述べるところの天然痘を人格化したハーリティーもしくはシータラーの説話から病難とする解釈も除外できない⁷。

(3) 無番窟の諸難救済図(図4)

第10窟脇の方形2メートル弱の小龕窟の右側壁に、諸難救済図は表されている。中央の観音像はほとんど破損し、両足先と蓮華座を残すのみである。観音はやはり楕円形の頭光をつけ、蓮華座の上にやや足を開いた姿勢で表されていたと思われる。ドーティーの端がわずかに残っているほかは、印相も持物も全く不明である。興味深いのは、観音の頭上で二飛天が宝冠を捧げ持ち、観音の頭上に載せようとしていることである。珍しい図像だが、カールリー石窟の三尊形式の仏陀の頭上にこれに似た図像が見られる。諸難の表現については、左右をそれぞれ4段に仕切り、左右各一場面を完全に欠失する。右列は上段より順に、火難、欠失により判断不能、摩滅のため判断不能、水難で、左列は上段より順に、毒蛇難、獅子難、欠失、羅刹あるいは悪鬼の難つまり悪眼が表される。

諸難上方には仏陀像が表されるが、第4窟のように観音上方にチャイティヤ窓風に龕を設けて仏陀を表現することはない。右側の仏陀はしっかりとした龕内に結跏趺坐し、説法印を結ぶ。左側の仏陀は仏龕はなく、倚坐像で左右に脇時を伴う三尊形式を呈する。諸難救済図と一連と見るべきか疑問が残るものの、当初とすれば、左右の仏陀像や危難を被る人物が男女で表される点等、この無番窟の作例は内容・形式面においてもアジャンター第4窟に類似している。

(4) 第11窟の諸難救済図

第11窟ヴェランダ左側壁に画像の諸難救済図が見られると伝えられるが、現在では諸難の各場面、観音の化仏や鹿皮、および右手も剥落のため確認できない。唯一、左手に蓮華を執るのが認められるのみである。観音の台座部分に墨書で奉献銘が残る⁸。

(5) 第17窟の諸難救済図(図7)

第17窟の諸難救済図は、ヴェランダ左前壁に位置する。ヴェランダ左側壁には上方半分五趣生死輪図が、また同房室入口左には入口の守門としてのマニバドラヤクシャ⁹、右に女神と見られる画像が残っている。第17窟壁画は本生図や仏伝が主な主題となっているが、このヴェランダ左側壁・左前壁は特殊な主題が採用されている。

さて、第17窟の諸難救済図では、観音はアジャンターでは定型化した山岳表現を背景として、等身

大の大きさで表されている。最上部には観音の上方左右にそれぞれ1体の飛天が花綱を持って讃嘆する。観音は苦行者らしく、上半身は裸形で、左下臍部に明らかに獣皮(鹿皮)を掛けるのみである(図7-1)¹⁰。画面下方は剥落が著しく、下半身が如何なる表現であったのかは残念ながら不明である。しかし、おそらくドーティーをつけていたと思われる。頭部背後には楕円形の頭光をつけ、頭髪は高く宝髻状に結い上げて髪髻冠とし、その前面はすでに剥落して確認できないが、おそらく化仏が表されていたと考えられる(図7-2)。図像的には、第4窟の諸難救済図の観音と同形式を取る。左手は肘をやや屈臂して垂下し、掌には数珠をかけ、更に指間に水瓶の頸を執っている。右手は垂下するが、原型は判然としない。シュリングロフによれば、観音の足元から生じる蓮華の茎を執っていたものとするが¹¹、マルマンは与願印とみる¹²。

諸難の場面は第2窟にみたように、観音の左右に4つずつメダイオンを設け、その中に各危難と危難に遭遇する人物が表される。各メダイオンは、第2窟はそれぞれが重る形で表されていたが、ここでは同列のメダイオンを幾何学的な山岳表現と蔓状植物をわずかに挿入して繋げる点が独特である(図7-3)。各危難は左列上方はおそらく火難、次に悪眼難とみられ、その下方は手を振り上げる人物は看取されるが、悪眼の難であるかは断定し難い。最下部は完全に剥落して見られない。右列は上方2つのメダイオンのみほぼ完存し、上方からまず毒蛇難、次に獅子難が表させる。三番目のメダイオンは上半分のみを残すが、マルマンも指摘するとおり象難と見られる¹³。

(6) 第20窟の諸難救済図(図5)

ヴェランダ右端の持ち送り内面に浮彫られた諸難救済図である。化仏、鹿皮ともに確認できないが、頭前の化仏は摩滅した可能性も考えられる。右手は与願印を結び、左手に水瓶を持つ。その配置からもわかるように、小像で、危難場面を省略し、技術的に他の作例同様に八難を示すことが困難であったことも推測される。まず、向かって左上方は子供を抱く女性が表されるが、既に述べた天然痘を人格化したハーリティーまたはシータラーであろう。左下方は供養者ともみえるが、枷鎖をされた人物を表した可能性も考えられる。向かって右は上方より象、毒蛇の難を表し、下方に上半身を現した合掌の人物がみえるが、難船場面の一部として水難を表したものであろう。第2窟同様、対尊となる菩薩がヴェランダ左端の持ち送り内面に表されており、左手に金剛杵を執る金剛手(ヴァシュラパーニー)の図像を採りながらも、頭上に仏塔を戴くことから弥勒菩薩立像と見られている¹⁴。第20窟は未完成ながら、仏殿に仏陀像と両脇侍像を備えるが、ヴェランダ持ち送り内面の観音像と弥勒像は対尊として明らかに意識されたものであり、石窟内の配置は極めて珍しい位置であるが、注目すべき遺例といえる。この配置については、第4章において第2窟の配置とともに検討する。

(7) 第26窟の諸難救済図

第26窟は4作例もの諸難救済図を残す。以下の順に検討してゆく。

- 1: 前庭右翼(上段)
- 2: 前庭右翼(下段)
- 3: 大チャイティヤアーチ内部腰壁中央
- 4: 左列柱上部長押

1: 前庭右翼上段(図8)

この作例は右翼上下二段に表された諸難救済図のうちの上段である。縁取りの全くない長方形の浅

い龕の中に表されている。

前庭右翼上段の諸難救済図は、長年の風化によって失われた部分を近年セメントによって補修がなされていたが、昨年原型に戻すため、再びそのセメントが剥がされた。その際、原型にも損傷を被り、以前に増して保存状態が悪化したのが現在の状況である。

龕中央には、楕円形の頭光をつけた観音が、地面より伸びる豪華な蓮華に正面観で直立している。顔から頭部にかけては摩滅が激しい。その痕跡から髪を髪髻冠に結い上げていたことがわかるが、頭前の化仏は確かめられない。上半身には着衣はないが、鹿皮が認められる。下半身は足首まで覆う長いドーティーを纏い、ドーティーは腰部で簡単に腰紐で留められている。右手は肘から先を欠損するが、姿勢からおそらく施無畏印を結んでいたことは想像される。左手は垂下し、蓮華座上より生じる蓮華の茎を執る。蓮華の花の部分は既に欠失している。

観音の左右には、各4景の危難場面を表しているが、ここでは各場面毎の仕切りはなく、4景が縦に連なり、まるで宙に浮いたように表されている。危難場面は龕の最上部より表され、仏陀や飛天はどこにも見られない。右列の危難場面は、最上段は摩滅してわからないが、以下悪眼、象、水の難が表されている。左列は最上段に剣、次に摩滅しているが獅子、3段目に毒蛇、最下段に少し腰を落として合掌する人物が表されている。枷鎖の難であろう。水難以外の危難場面にはすべて危難を被る人物が一人のみで表される。

2：前庭右翼下段（図9）

上段と同じく、長方形の龕の中に高浮彫で表されるが、龕は外縁部より順に蓮弁文、螺旋連珠文、小花文と、豪華な三重の縁取りがなされている。また外縁部の二重の縁取りの両下部には矮人が一人ずつ立つ。

観音は蓮華座の上にやや足を開いて、直立正面向きの姿勢で立つ。頭髪は髪髻冠に結い、その前面には化仏を納めたと思われる小仏龕が残るが、中に嵌められたはずの化仏は失われている。上半身は裸形で何も纏わず、下半身は簡単にドーティーを纏い、それを腰紐で留めるのみである。装身具は一切認められない。右手は施無畏印を結び、その掌には数珠が掛けられている。左手は垂下し、大地から生じる未敷蓮華の茎を執りつつ、水瓶をもつ。

上段の諸難救済図と同様に、上方に仏陀や飛天が表されることはなく、観音の両側は危難場面で充填される。その表現の特徴は、危難場面が円形のメダイヨンや長方形の区画に区切られることがなく、仕切りなく危難場面が縦に連なっていることである。ここでは左右に5場面ずつ、合計10場面で構成される。

右列最上段の危難場面では、翼のある人物を背に五つの龍蓋をつけた龍が観音に向かって合掌している。マルマンはいかなる見解も呈していないが、ファーガッソンやバージェスはカンヘーリー石窟に龍とガルダを配した例があることからガルダの難と解釈する¹⁵。また「普門品」のインドラ神に倒される悪龍ヴリトラの神話から¹⁶、雷難との解釈も考えられるが、それもこの作例のみでは確定できない。この未詳危難の下には病難あるいは悪眼の難、次に毒蛇、象の難が表され、最下段は著しく損傷しているが、水難であろう。一方、左列は上から剣（王難）、火の難が表され、三段目には右手を高く掲げた小太りの人物のみが表されている。しかし、如何なる危難であるか判然としない。続いて獅子難、最後に枷鎖難となっている。

3：大チャイティヤアーチ内部腰壁中央¹⁷

観音は楕円形の頭光を有し、髪髻冠で頭前で坐像の化仏を持つ。右手は施無畏印で、数珠を掛け、左手は大地から生じる蓮華の茎を執りながら水瓶を持つ。上半身は何も纏わず、下半身は他の作例と同様にドーティーを纏い、紐で簡単に留めるのみである。観音上方左右には、飛天各一体が配され、観音の頭上で宝冠を捧げ持っている。足元には右に供養者らしき人物を配する。

危難場面は区画を設けず、左右に4場面ずつ縦に続けて配する形式をとっている。右列上方は剣(王難)とも考えられるが不明、順に羅刹あるいは悪鬼の難(悪眼)、象難、水難で、一方、左列は上方から刀剣難とみられるもの、毒蛇、獅子の難、枷鎖難が表されている。区画を設けない点の他、諸難の選択など同窟前庭右翼の構成に共通点が見出せる。

大チャイティヤアーチの腰壁は、諸難救済図のほか、過去七仏や千仏などが補刻されている。これらはいずれも石窟が当初の寄進者によって放棄された後に小規模の寄進として彫刻されたものである。

4：左列柱上部長押(図10)

諸難救済図は、長押という位置からもかなり縮小された区画に表現されている。長押の多くは仏三尊像で、この諸難救済図も、仏三尊像の区画に隣接し、その区画の一方に接するのが観音菩薩立像となっている。つまり、仏三尊像の両脇に観音菩薩立像を配する形式である。しかし、この形式は第26窟はおろか、他窟にも看取されない。それでも第26窟の造営当初の彫刻と見られ、その主題選択と配置は慎重を要する問題といえよう。

列柱で区切られた区画に、観音と危難場面が所狭しと表されている。観音は楕円形の頭光をつけ、ただ髪髻冠を結うのみで化仏を表さない。上半身は鹿皮をつけず、下半身は他の作例よりも短めのドーティーを纏っている。紐で簡単に留めるのは他と変わらない。右手は指先を摩滅しているが、施無畏印を結び、数珠を掛ける。左手は蓮華を持たず、水瓶を持つ。

諸難救済の危難場面は左右に4場面ずつ、最下部を除き、半円形状の区画内に表される。向かって上から順に獅子難、不明、不明、水難、左上は象難であるが、以下は不明で同窟前庭右翼下段にみた小太りの人物がみられるのが注目される。ここでは第20窟の作例のように区画が小さい場合でも場面数が制限されていない。また、現在危難場面が不明で、観音に救いを求める人物のみを表したように見えるのは、当初彩色を施されていた部分が剥落し、下地のみあるいは剥落した部分があるためである。

2. 観音菩薩の図像

(1) 諸難救済図における観音像の特徴(資料①)

そもそもインドにおける観音信仰の実際が文献上に現れてくるのは、5世紀初頭の『法顕伝』、次いで7世紀前半の玄奘による『大唐西域記』においてであり、玄奘の記録においてもその像容については唯一頭前の化仏に触れるのみで、他に特徴は示されていない。マルマンはサンスクリット写本や漢訳經典によってインドにおける密教以前の観音の唯一の確実な図像的特徴として、改めて頭前の化仏を挙げている¹⁸。しかし、マルマンも指摘することだが、第一に典拠となる『観無量寿経』の成立時期、および頭前の化仏の実作例との関係、第二にその經典に説かれる化仏は立像とされ、如何なる尊格の化仏であるのか明らかにされていないのである¹⁹。

既に第1章でみたように、化仏を持つ像とそうでない像が混在し、また化仏も『観無量寿経』に説かれる立像ではなく、結跏趺坐で表されている²⁰。ここで、アジャンターにおける諸難救済図にみられる観音像の図像的特徴を纏めておきたい。その特徴は次の通りである。

- 1) 正面観で直立する。
- 2) 頭髪は高く結い上げた髪髻冠で、頭飾などは付けない。
- 3) 上半身は裸形かもしくは鹿皮をかけ、下半身は簡素な長いドーティーを簡素な腰紐で留める。
- 4) 装身具は一切つけない。
- 5) 印相は以下の4つに分類される。
 - a. 右手は施無畏印で、左手は大地から生じる蓮華を執る。
 - b. 右手は施無畏印で、左手は水瓶を執る。
 - c. 右手は施無畏印で、数珠をかけ、左手は大地から生じる蓮華の茎を執りつつ、水瓶も執る。
 - d. 右手は与願印を示し、左手は水瓶を執る。

持物は蓮華、数珠、水瓶などを執るが、その組み合わせはさまざまで定型を得ておらず、上半身は殆どが裸形で、第1窟後廊左後壁の守門像や第19窟ファサード左右の守門像とは対照的に装飾性が認められないのが特徴である。「普門品」には観音が種々の姿で現れ、法を説くとあり、その一つとして梵王身つまりブラフマーの姿を取るという記述が見られるが²¹、イメージとしては初期の釈迦の脇侍の図像が帝釈天と梵天であったように、ここでも観音のイメージが梵天のそれを残しているとも考えられる。

一方、諸難救済図における観音ですら、それが諸難救済図であるから観音と認識できるものの、観音菩薩のみの図像を見ると、ヴァリエーションが豊富で、アジャンター石窟の仏三尊像における脇侍図像の定型が全くみられないのとも呼応している。このことは、後述する諸難救済図の配置の問題においても触れるが、アジャンターにおける仏三尊像の脇侍の図像形成と関わるので、別に稿を設けたいと思う。

3. 諸難の図像

(1) ヴァリエーションと配置

アジャンター石窟の諸難場面は次の3つの表現方法に分類される。

- ①メダイヨン内に表現されるもの
- ②水平の仕切りを設けて、その上方に表現するもの
- ③区画も仕切りも設けずに場面を連ねて表現するもの

これらの3つの表現方法は、制作時期を追って変化したものではない。まず、①のメダイヨンを使用するのは画像のみにみられる。おそらく、それは画像ゆえに充填する必要性が生じる背景—彫刻では無視することが可能である—が大いに関連していると思われる。観音菩薩と危難場面だけではなく背景を描写する必要があったために、つまり、背景ゆえに諸難場面を明確に表現するため、メダイヨンという背景から完全に分離できる表現方法を選択したとも考えられよう。部分的にメダイヨンを採用した第26窟長押の作例は、浮彫を施す上での便宜性を優先させた結果とみられ、画像の作例とは異なる。

②と③は浮彫に限られるが、特に③の中でも諸難救済図の表現空間が長押や持ち送り内面など小画面となる場合は、諸難場面を少くして、区切りも設けていない。

また、危難場面の配置はいずれの作例も共通しないが、個々の配置においてはいくつかの規則性が見出される。アジャンター石窟の作例は表②にみられるように2～8の諸難場面が観音を中心に左右に配されている。例外もあるが、加護を求める人物はそれぞれの危難場面—獅子難、毒蛇難、象難、悪眼難あるいは病難、火難、剣(王難)、枷鎖難、水難と共に表される。諸難場面が幾つであっても、まず水や船を表す難船、つまり水難は必ず区画最下段に表現され、対して火難の場合は決して最下段に表現されることはない。殆どの場合、最上区画または上から2番目の区画に表される。水を画面下方に表

現するのはアジャンターの本生図や譬喩物語図にも見られることで²²、説話主題は画面構成に左右されるところが大きいものの、画面下方における表現が一般的であったことが窺がえる。また、枷鎖難は例外は認められるものの、水難と同様に最下部に表されることが多いことも指摘しておこう。

(2) 諸難の典拠—テキストをめぐって

諸難救済図に関しては、従来より『妙法蓮華経』第七卷内第二十五品「観世音菩薩普門品」(梵本 *Saddharmapuṇḍarikasūtra*) に依拠するとされている²³。この梵本 *Samantamukhaparivato-namavalokiteśvara-vikurvana-nirdesa* の冒頭で、アクシャヤマティは世尊に対して「如何なる理由で〈自在に観察する〉(Avalokiteśvara) 菩薩は観自在と呼ばれるのですか」と問うのに対して世尊は観自在と名づける所以を説明している。その所以こそがこの諸難救済なのである。ところが、アジャンター石窟にみられる諸難救済図はいずれも「普門品」では解釈できないのである。

普門品と作品が一致する危難は、火難、剣(王難)、毒蛇難、悪眼難、枷鎖難、そして水難のみである²⁴。文献中には猛獣による獣難も記されるが、漠然と鋭い爪と牙を持つ恐ろしい猛獣とするのみで、作例に見られる獅子や象といった固有の名称は記されていない。これら二種の動物を悪獣と見做すならば、一つの偈から二つの場面を表現したことになる。いずれにしても現実的な危難が造形に反映されたとみるのが妥当であろう。

また、フーシェの指摘するように病難、つまり天然痘を人格化したハーリティーやシータラーの難であるが²⁵、これも切実に人々が病に苦しんだとすれば、現実の生活を反映した危難として解釈できよう。この病難の図像は炎髪の人物が危難として表されるため、単純に羅刹あるいは悪鬼とみて悪眼難とも解釈しうるものである。けれども、さまざまな民衆の一般概念が融合した上に生み出された図像と仮定すれば、病難が「普門品」の諸難救済と関係を持たずとも、『アングッタラ・ニカーヤ』や『ティヴィヤ・アヴァダーナ』、『カウティリヤ実理論』に記される危難²⁶に対する概念が図像を形成した可能性も十分考えられるのではないだろうか。

以上のように、アジャンター石窟にみられる諸難救済観音像に表された全ての危難に一致する経典は皆無である。しかしながら、密教部の経典類に目を転じると、驚くべきことに功德の内容に諸難救済図の実作例に近似するものが存在する。以下にそれら経典とその危難を列挙する。

①東晋・竺難提等訳『請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼経』²⁷

王難・悪獣難・盜賊難・枷鎖難・羅刹難・毒藥難・刀劍難

②宋・法顕訳『佛説一切佛撰相応大教王経聖観自在菩薩念誦儀軌』²⁸

獅子難・象難・火難・蛇難・賊難・禁縛難・海難・鬼難

③宋・天息災訳『讚揚聖徳多羅菩薩壹百八名経』²⁹

獅子難・象難・虎難・蛇難・水難・火難・賊難・枷鎖難

中でも②『佛説一切佛撰相応大教王経聖観自在菩薩念誦儀軌』は拓地結界・運心観想・観自在菩薩を中台とする八葉蓮華上の八方賢聖の菩薩とその真言、功德、図像などが説かれた経典であるが、この八葉蓮華のうち東南葉に位置する嚩日嚩鉢訥摩説哩菩薩の功德について述べる中に、諸難救済観音像にみられる諸危難の内容と一致する項目が列挙されているのは注目される。密教美術の隆盛したパーラ朝ではターラー女尊の諸難救済図が造像され、上記の密教経典との関連性が十分考えられるが、アジャンターの作例との間には3～4世紀の隔たりがあり、西インドに流行した諸難救済図の伝統がオリッサ地方へ伝播した可能性を仮定するとしても、どのような経緯で伝承されたのかその中間を生める作例が皆無であるのが残念である。

4. 仏坐像について

第4窟と無番窟には観音上方の左右脇に仏坐像を表している。マルマンは多宝塔が表されない点が問題としても二仏は釈迦と多宝であると解釈しているが、二仏のいずれを釈迦あるいは多宝とするかは明らかにしていない。また、敦煌の法華経変相図にみる仏陀像の変遷—まず、釈迦を中心とした法華経全般を図示したもの、次に釈迦を中心に構図した普門品変相図、最終段階として仏陀像を消滅した観音を中心とした普門品変相図—をアジャンターにも応用し、仏陀像の消滅を普門品信仰からの観音信仰の展開と解釈する³⁰。しかし、アジャンターの諸難救済図において、第4窟と無番窟はその様式からも他の仏陀像を表さない諸難救済図よりも後に制作されたものであるからマルマンの解釈は問題であろう。また山田耕二氏も、アジャンター後期石窟の中でも初期に位置する第4窟の諸難救済図では仏坐像があるのに対して、第17窟や第2窟では仏坐像が見られないとして、初期に仏坐像が存在したものが、後に表されなくなるという展開を想定されているが、これも上述したとおり、第4窟の諸難救済図の制作時期を石窟の造営時期と同じと見たことによる解釈といえる³¹。

アジャンターよりやや時代の下るアウランガーバード第7窟諸難救済図(図11)はアジャンター第4窟や無番窟同様、仏坐像を表すが、さらに中央の観音のほかにも、救済に駆け付ける観音を各危難場面に表す点で、諸難救済図の表現形式が徐々に変化しつつあることがわかる。

5. 諸難救済図の配置をめぐる問題

アジャンターの諸難救済図のうち、石窟造営当初からのプランとして描かれたあるいは彫刻された作例は、第2窟、第17窟、第20窟、第26窟の4作例のみである。石窟内の配置という視点から、諸難救済図がどのような機能を負っていたのかをここで探してみたい。4作例のうち、第26窟作例を除く3作例はその配置において一つの共通した方向性を示している。第2窟は仏殿左前壁、第17窟はヴェランダ左前壁、第20窟はヴェランダ列柱右壁柱持ち送り内面というように、それらはいずれもなんらかの空間の入口裏面に表現されている点にある。さらに、この3例の対称的な位置には対尊となる尊像が存在することにも注目する必要がある³²。結論から述べれば、それらは観音信仰を表した図像である以上に、観音菩薩の功德としての「守護」という性格が、第20窟諸難救済図の隣の列柱柱頭内面に表された財宝神ニディの持つ守護の性格と重なり、石窟における守護を目的として配されたのではないだろうか³³。従って、諸難救済図は石窟を荘厳する本生図や仏伝図とは全く性格を異にするといえよう。では諸難救済図の対尊となる図像もまた、「守護」の性格を帯びているのかというと、第20窟作例の対尊である弥勒菩薩(図6)にみるように、本来「守護」という性格はない。結果的に、石窟空間の守護として配されたことになるが、対尊は石窟のシンメトリカルな構造ゆえに配されたものである。例えば、第20窟の諸難救済図に対する左壁柱持ち送り内面の弥勒菩薩立像は右壁柱とシンメトリーになるように配されたもので、伝統的な対尊(蓮華手・金剛手)の図像であった金剛手を応用して弥勒菩薩としたものと解釈できる³⁴。第2窟作例も右前壁に豪華な宝冠を戴く対尊(図2)を配し、仏殿の本尊の仏陀像左右に配された脇侍像とは全く異なる性質であることは明白である。

一方、第26窟作例は仏三尊像の向かって右に位置し、仏三尊像の向かって左には観音菩薩立像が表されている。つまり、仏陀像の脇侍像とは別に、その外側に観音諸難救済図と矮人を従えた観音像が配されている。明らかに、いずれの観音像も仏脇侍としてではなく、単独の尊像として意図していることがわかる³⁵。観音信仰の現われとみることもできようが、第26窟窟内の長押の中で、なぜ、この位置に諸難救済図を配する必要があったのかは残念ながら不明である。

6. アジャンター石窟以降の作例

アジャンター石窟以外にも西インドの石窟には観音諸難救済図の作例が豊富に残っている。アウランガーバード第7窟ヴェランダ右後壁の観音諸難救済図(図11)は、アジャンターでは見られなかった新たな表現形式への移行を示している。観音菩薩像の図像や平板な区切りを挿入して作られた危難場面の区画、左右上方に表された結跏趺坐の説法印仏陀像はアジャンターにも見られたが、ここでは、各危難場面—左上段より獅子、毒蛇、象、悪眼で、一方右は上段より火、剣(王難)、枷鎖、水難である—に救済に飛来する観音が小像で表されている点が新しく、またその図像は条帛や天衣を纏うところが独特である。山田耕二氏はこれを飛来小観音と呼ばれている³⁶。

エローラ第3窟の作例(図12)は危難場面が仕切りなく表され、アウランガーバードに見たような飛来小観音も表されない。小画面の上に、さらに摩滅が甚だしく、危難の同定は困難である。わずかに左上が火難で、右列が上方より、獅子、毒蛇、象、悪眼の難とわかる。同第4窟小祠堂内に残る作例(図13)には、飛来小観音が確認できる。残念ながら、新しい通路を設けるためであろうか、観音の左側を大きく崩してしまっているので、危難場面の全体像は窺がえない。区画は平板な区切りで仕切られており、現存する左列は上段から火、剣、枷鎖、水難が表される。このほか、観音が頭光でなく拳身光背をつける点、また飛来小観音は左手に数珠や蓮華を執る点が注目される。

なお、西インドの石窟群には含まれないが、初期西チャールキヤ朝の遺跡として知られるカルナータカ州バーダーミ石窟にも諸難救済図が残る(図14)。バーダーミ石窟はヒンドゥー石窟であるため、諸難救済図は異質な存在である。しかし、カルナータカ州マイソール近辺から出土した11世紀末頃の石版碑銘には諸難を救済するターラー尊に対する帰敬文が述べられている³⁷。既に観音菩薩の諸難救済ではなく、シャクティズムの興隆とともに女尊ターラーの諸難救済へと密教化を遂げているが、諸難救済図が引き続き信仰の厚かったことを示すものといえよう。さて、バーダーミの現存作例であるが、これは観音の左前方に合掌する僧形の供養者が表されている。観音は大地より生じる未敷蓮華を執っていたようだが、全体的に摩滅・破損により像容は明らかではない。通常、髪髻冠となる部分が丈高いのも気になるが、左右の危難場面から諸難救済観音と見るのが妥当なのであろう。危難場面は全9場面認められるが、確認できるのは右列に火、毒蛇、水難、左列に武器(盗賊難あるいは王難)、枷鎖難、象難のみである。状態が良好ではないが、上述の作例よりも時代の下るものようである。

このほか、カンヘリー石窟にも諸難救済図の作例が3作例知られるが、紙面の都合上割愛するが、いずれも飛来小観音を伴う点が注目される。

むすび

以上、アジャンター石窟の諸難救済図についてさまざまな角度から検討した。諸難救済図に表される観音像も危難場面も定型というものはなかった。危難に注目した場合、アジャンターを含め、インドの諸難救済図は八難救済図である場合が多いが、それはターラー女尊の諸難救済図は除き、決して八難という法数が定められるには後期観音経典を待たねばならず、『妙法蓮華経』であっても危難の数は規定されていないのである。確かに危難の数は、表現される区画の大小に拠るところが大きかったであろうが、それが可能であったのは、造形化された危難の内容が当時のインドの生活における危難の概念を反映した可能性が考えられることから、危難の数が当時未だ定まっていなかったためではないだろうか。また、アジャンターをはじめ西インド諸石窟に見られる諸難が、後期観音経典の一つ『佛説一切佛摂相応大教王経聖観自在菩薩念誦儀軌』に説かれる諸難に一致することは、インドにおいて流布していた諸難救済図の危難が影響した可能性も考えられ、注目される。

石窟の造営当初のプランと異なる諸難救済図の作例が多く見られるのも、思想内容よりも人々の、日々の災難から救済されようと観音の功德を求める現実志向が諸難救済の観音信仰を広め、人々の中に浸透していたことを示すものであろう。また、観音菩薩が仏三尊像の脇侍としてではなく、観音諸難救済図として石窟内に図像化されたことは、観音の守護という功德を石窟の守護尊として利用しようとした現れとして捉えられるのではないだろうか。

註

- 1 ターラー女尊の諸難救済図の作例は、オリッサ州ラトナギリ出土の作例が知られる。世界美術大全集東洋編インド(2)、小学館、1999、図88(p.116)および挿図83(p.132)を参照のこと。
- 2 Mallmann, M.T. de. (1948), *Introduction a l'etude d'Avalokitesvara*, Paris., Schlingloff, D. (1988), *Studies in the Ajanta Paintings – Identification and Interpretations*, India, 175～180., 島田明 (1997)「アジャンターの菩薩図像—観音、弥勒像を中心に—」『仏教芸術』, 237, pp.42-70., 山田耕二 (1979a)「インドの観音救済図」『仏教芸術』125, pp.48-64.; (1979b)「ポストグプタ時代の西インドにおける観音の図像的特徴とその展開—石窟寺院を中心として」『美術史』106, pp.87-102.; (1983)「アジャンターの菩薩像について」『仏教芸術』, 145, pp.47-70.
- 3 後述する第11窟ヴェランダ左側壁は損傷が甚しく、諸難場面が確認できないが、観音菩薩立像が諸難救済図であるとの報告があるため、先学に倣い、作例に含めた。よって、実際諸難救済図と明確に同定できるのは9作例である。また、W. スピンク博士のご指摘により第6窟上階左側廊壁にも観音立像の一部と見られる残像と観音に救済を求めるかのような人物像を確認したが、断片的であるため、これも除外した。
- 4 ヤズダニはこの像を「弥勒」立像とするが、左列最下部に残る危難を「水難(難船)」と正確に記述しており、なぜ弥勒とするのか判然としない。
- 5 仏殿の仏坐像台座の刻銘によれば、「Abhayanandin と Skandhavasū との息子で、僧院主である Karvvaṭiṃyā の族姓に所属する Māthura の寄進物である。(以下略)」とあり、当初の石窟は「マートウラ」なる人物の寄進であったことがわかる。塚本啓祥 (1996)『インド仏教碑銘の研究1』, 平楽寺書店, pp.361-362.
- 6 Mallmann, M.T. (1948), p.294.
- 7 Foucher, A. (1917), *The Beginnings of Buddhist Art*, London, p.280.
- 8 deya[dha]rmmo upā(saka)sya yad atra p[un]ya[n] [tad bhavatu] sarvvas[ā]kya[s]ya...(Cohen, R.S., *Setting the Three Jewel: The Complex Culture of Buddhism at the Ajanta Caves*, as a dissertation, 1995, UMI, pp.335-336).
- 9 (Cohen, R.S. (1995), pp.335-336).
- 10 山田耕二氏は鹿皮を天衣とみる (山田 (1979b), pp.88-89.)。
- 11 Schlingloff, D. (1988), p.176.
- 12 Mallmann, M.T. (1948), p.137.
- 13 Mallmann, M.T. (1948), p.293.
- 14 永田郁 (2002)「アジャンター石窟における守門像について—第十九窟ファサードの守門ヤクシャ像を中心に—」『美術史』, 153, p.23.
- 15 Burgess, J. and Fergusson, J. (1880), *The Cave Temples of India*, London, p.385.
- 16 坂本幸男・岩本裕 (1976), 『法華経』, 岩波書店, pp.263-265.
- 17 島田明 (1997), 44頁図1を参照のこと。
- 18 Mallmann, M.T. (1948), pp.308-310.
- 19 「頂上毘楞伽摩尼妙寶。以為天冠。其天冠中有一立化佛。」(大正藏卷12, 343c)
- 20 アグラワラに拠れば、クシャーナ時代以後のインドの全ての頭前の化仏を密教五仏で解釈し、それによって化仏をつけたそれぞれの像の比定を試みている (Agrawala, V.S. (1965), *Studies in Indian Art*, Vanarasi, pp.37-146)。
- 21 「而是菩薩現種種身。處處為諸衆生說是經典。或現梵王身。」(大正藏卷9, 56c)
- 22 アジャンター第1窟左側廊壁「カリヤーナカーリン本生」図をはじめ、同第17窟右側廊壁「シンハラ譬喩物語」図などにみられる。
- 23 姚秦の鳩摩羅什の『妙法蓮華経』第二十五「観世音菩薩普門品」は、「大火」をはじめとする諸難を列挙しており、観音の慈悲救済を念じる功德力によってあらゆる災難から救われることが説かれる (大正藏卷9, 56c～)

- 58b)。この『観音経』の諸難を七難と数えるのは、智顛の『観音義疏』（大正蔵巻34, 923a）などに拠ってであり、「普門品」には七難という語はみられない。梵本の偈頌もまた危難の数は規定しない。
- ²⁴ 坂本幸男・岩本裕（1976）、『法華経』、岩波書店、pp.263-265。
- ²⁵ Foucher, A. (1917), *The Beginnings of Buddhist Art*, London, p.280.
- ²⁶ 『アングッタラ・ニカーヤ』は2偈に互って8つの苦諦（生、老、病、死、火、水、王、賊）を述べる（『南伝大蔵経』巻18, 第2「只尸品」, 215）。『ディヴィヤアヴァダーナ』では2箇所^二に危難が述べられ、人、非人、虎、熊の難などの危難がある（Cowell, E.B. and Neil, R.A. (1970), *Divyavadana, A Collection of Early Buddhist Legends*, VIII, pp.92-93, 119）。カウティリヤの『アルタシャーストラ』では、天命による八大恐怖として火事、洪水、病氣、飢饉、鼠、野獣、蛇、羅刹が挙げられる（上村勝彦（1997）『カウティリヤ 実利論—古代インドの帝王学—』（上）, 岩波文庫, p.331）。
- ²⁷ 大正蔵巻20, 35b。
- ²⁸ 「此菩薩微妙真言。若持誦人作心念時。便能降伏句召。若持誦七遍能擁護己身。若持誦千遍。能除毒藥刀劍師子象蛇火賊禁縛海鬼等難。及除瘡哩枯^二奈哥訥蹉哩彌^二多訥哩朗^二擬多等病。（略）」（大正蔵巻20, 65c）
- ²⁹ 大正蔵巻20, 474c。
- ³⁰ Mallmann, M.T. (1948), p.298.
- ³¹ インドの諸難救済図の基本的構図が敦煌の最終段階に相当するということから、インドへの逆輸入も示唆されているが、制作時期を考慮すると無理があろう。
- ³² 第17窟ヴェランダ右前壁は現在わずかに壁画断片が残るが、以前は菩薩像が描かれていたようだ。
- ³³ 第20窟の作例は、永田郁氏が指摘するように財宝神ニディと観音菩薩の結びつきを示唆する貴重な作例として注目される（永田（2002）, 23および註（38））。もし、観音菩薩を仏陀像の脇侍とする概念が既に定着していたならば、アジャンター石窟の仏三尊像の脇侍に図像的なばらつきは起こらなかったはずである。むしろ、観音菩薩像が単独像として図像的に定型化する以前であっても、「守護」という役割が、守門像や扠子を執るのみの脇侍像あるいはクシャーナ時代からの仏三尊像にみる蓮華手の伝統的な脇侍図像に、観音の図像的特徴を付加するという動きに向かわせたのではないだろうか。仏脇侍の場合、金剛手という根強い伝統的図像によって弥勒図像の導入は阻まれたようだが、守門像においてはアジャンター第11窟ヴェランダ左後壁の守門像や第19窟チャイティヤ窓右の守門ヤクシャ像に、守門像と弥勒菩薩の図像の混淆を見ることができる（永田（2002）, pp.17-23）。
- ³⁴ 永田（2002）, p.27。
- ³⁵ 先述の第2窟作例をはじめとする3作例と同様に、諸難救済図と矮人を従えた観音像をシンメトリーを重視した結果の対尊として考えることも可能かもしれない。
- ³⁶ 山田耕二（1979a）, p.58.
- ³⁷ ḥari-kari-śikhi-phaṇi-taskara-nigaḷa-jaḷ-ārṇṇava-shi(pi)śāchabhaya-sa(śa)mani(ni)sa(śa)si(śi)-kiraṇa-kānti-dhārṇi bhagavati tāre namas=tubhyaṃ ॥ (J.F. Fleet. (1881), Sanskrit and Old-Canarese Inscriptions, *The Indian Antiquary*, **10**, p.185)

引用文献一覧

- Agrawala, V.S. (1965), *Studies in Indian Art*, Varanasi.
- Burgess, J. and Fergusson, J. (1880), *The Cave Temples of India*, London.
- Cohen, R.S. (1995), *Setting the Three Jewels: The Complex Culture of Buddhism at the Ajanta Caves*, UMI.
- Cowell, E.B. and Neil, R.A. (1970), *Divyavadana, A Collection of Early Buddhist Legends*.
- Fleet, J.F. (1881), Sanskrit and Old-Canarese Inscriptions, *The Indian Antiquary*, **10**, 185-190.
- Foucher, A. (1917), *The Beginnings of Buddhist Art*, London.
- Mallmann, M.T. de. (1948), *Introduction a l'etude d'Avalokitesvara*, Paris.
- Schlingloff, D. (1988), *Studies in the Ajanta Paintings – Identification and Interpretations*, Delhi, 175-180.
- 上村勝彦（1997）『カウティリヤ実利論—古代インドの帝王学—』（上）, 岩波文庫。
- 肥塚 隆、宮治 昭編（1999）『世界美術大全集東洋編インド（2）』, 小学館。
- 坂本幸男・岩本 裕（1976）、『法華経』, 岩波書店。
- 島田 明（1997）「アジャンターの菩薩図像—観音、弥勒像を中心に—」『仏教芸術』, **239**, 42-70.
- 塚本啓祥（1996）『インド仏教碑銘の研究1』, 平楽寺書店。
- 永田 郁（2002）「アジャンター石窟における守門像について—第十九窟ファサードの守門ヤクシャ像を中心に—」『美術史』 **153**, 15～30.

- 松本栄一 (1937) 「観音を中心として構図せる普門品変相」『敦煌画の研究』東方文化学院東京研究所, 132-140.
- 山田耕二 (1979a) 「インドの観音救済図」『仏教芸術』**125**, 48-64.
- (1979b) 「ポストグプタ時代の西インドにおける観音の図像的特徴とその展開—石窟寺院を中心として」『美術史』**106**, 87-102.
- (1983) 「アジャンターの菩薩像について」『仏教芸術』, **145**, 47-70.
- 頼富本宏 (1984) 「八難救済ターラー考」『神秘思想論集』成田山新勝寺研究会 (『インド古典研究』**6**), 423-442.

[附記]

本稿は日本学術振興会特別研究員のための平成13年度科学研究費補助金による「アジャンター壁画の研究 — アジャンター石窟寺院の造営年代に関する研究の一環として —」の研究成果の一部である。末筆ながらここに記して、感謝申し上げます。

資料① アジャנטアター石窟における諸難救済図の作例と観音菩薩像の画像 (○?) は摩滅欠損するが、可能性があることを示す。

	配置	髮髻冠	宝冠	化仏	ドーテイ	天衣	鹿皮	左手	右手
第2窟	仏殿左前壁	○		欠	○	○		水瓶	変菰の施無畏印
第4窟	ヴェランダ右後壁	○		○	○			蓮華	欠 (施無畏印?)
無番窟	方形小窟右側壁	欠 (○?)	○	欠	○		欠	蓮華	欠
第17窟	ヴェランダ左前壁	○		欠 (○?)	○		○	水瓶・数珠	欠
第20窟	ヴェランダ右壁柱	○		欠 (○?)	○			水瓶	与願印
第26窟	前庭右翼上段	欠 (○?)		欠	○		○	蓮華	施無畏印
第26窟	前庭右翼下段	○		○	○			蓮華・水瓶	施無畏印・数珠
第26窟	チャイテイヤーチ腰壁	○	○	○	○			蓮華・水瓶	施無畏印・数珠
第26窟	左列柱長押	○			○			水瓶	施無畏印・数珠

資料② アジャントアター石窟における諸難救済図の危難位置

* 第11窟の作例は損傷のため除外する。また斜線は剥落等により不明部分、「悪眼」は羅刹あるいは悪鬼の難を示す。

第2窟仏殿左前壁

火難?		
獅子	劍(王難)?	
	火難?	
枷鎖?	水難	

第4窟ヴェランダ右後壁

象	火難	
獅子	毒蛇	
劍(王難)	枷鎖	
水難	悪眼?/病難?	

無番窟右側壁

火難		毒蛇
		獅子
水難		悪眼?/病難?

第17窟ヴェランダ左前壁

火難		毒蛇
悪眼?		獅子
		象

第20窟ヴェランダ右壁柱

病難？ (シータラー?)	象
	毒蛇
供養者？ ／枷鎖？	水難

第26窟前庭右翼 上段

／	劍(王難)
	獅子
	毒蛇
	枷鎖
悪眼	象
水難	

第26窟前庭右翼 下段

ガルダの難？ (雷難?)	劍(王難)
悪眼	火難
毒蛇	？
象	獅子
水難	枷鎖

第26窟大チャイテイヤーチ腰壁

劍？	劍？
悪眼	毒蛇
象	獅子
水難	枷鎖

第26窟左列柱長押

象	獅子
？ 救済を 求める人	？ 救済を 求める人
？ 救済を 求める人	？ 救済を 求める人
病難？	水難



図1 観音諸難救済図 仏殿左前壁 アジャンター第2窟



図2 図1の対尊 仏殿右前壁 アジャンター第2窟



図3 観音諸難救済図 ヴェラング右後壁 アジャンター第4窟



図4 観音諸難救済図 右側壁 アジャンター無番窟



図5 観音諸難救済図 右壁柱持送り内面
アジャンター第20窟



図6 弥勒菩薩立像 左壁柱持送り内面
アジャンター第20窟



図7 観音諸難救済図 ヴェランダ左前壁
アジャンター第17窟



図7-1 同 細部 ヴェランダ左前壁
アジャンター第17窟



図7-2 同 細部 ヴェランダ左前壁
アジャンター第17窟



図7-3 同 細部 ヴェランダ左前壁
アジャンター第17窟



図8 観音諸難救済図 上段
アジャンター第26窟右翼



図9 観音諸難救済図 下段 アジャンター第26窟右翼



図10 観音諸難救済図 アジャンター第26窟長押

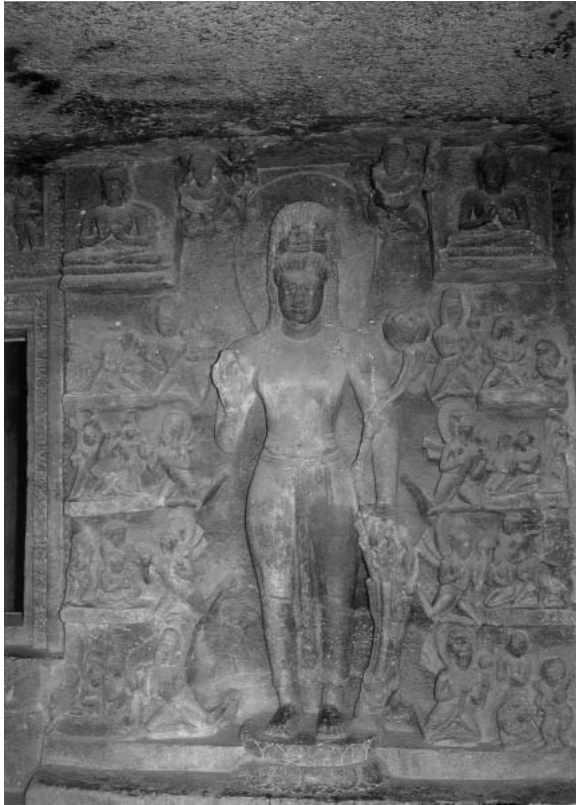


図 11 観音諸難救济図 ヴェランダ左後壁
アウランガーバード第7窟

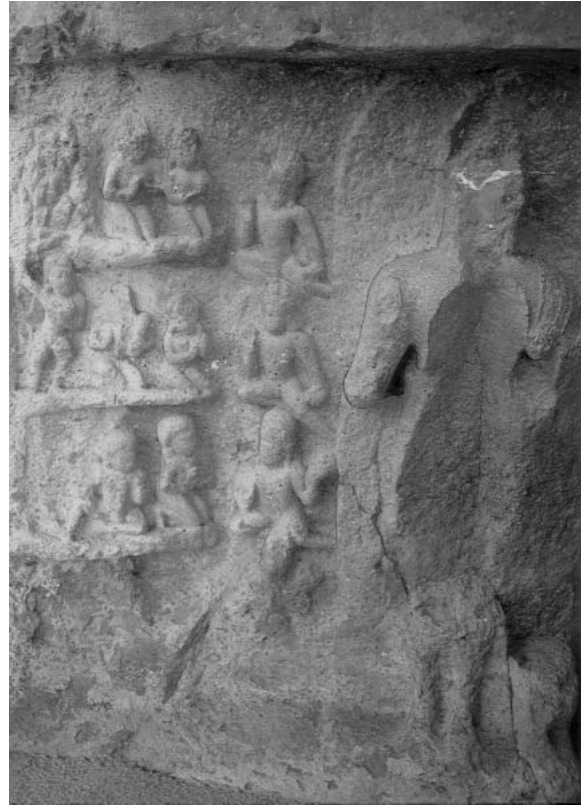


図 12 観音諸難救济図 左壁 エローラ第3窟右翼



図 13 観音諸難救济図 右壁 エローラ第4窟脇小祠堂



図 14 観音諸難救济図 バーダーミ無番窟